

木簡に関する新しい情報と研究を毎年お届けするこの雑誌も、三〇号に近づきつつある。これまでに築かれてきたよき伝統が着実に受け継がれてきていることに、今さらながら感慨を禁じ得ない。その伝統のひとつは、報告の様式から表記のしかたに至るまで、一定の「型」ができており、それによって、全国にわたって年々報告される多様な新資料を統一的な基準で検討できることである。しかし、一方で今後検討してゆかねばならない課題があることもまた事実である。

本号で紹介する木簡のうち、比較的まとまつた点数のものとして目を引くのは、「概要」でも指摘されているように、近世の木簡群である。これらをこれまでの伝統的な本誌のスタイルによつて今後も報告してゆくべきか、時代ごとの出土文字資料のあり方に即したものに改めてゆくべきかは大きな問題である。ただ、そのための前提となる、近世の木簡について論じた研究がまだまだ不足しているように思われる。古代に比して史資料が豊富な近世では、木簡から新たな事実が明らかになることは少ないという声も聞かれるが、形状や機能なども含めて検討し直してみると、新たな発見にもつながる可能性がある。また内容的にも、例えば本号では、江戸や金沢をはじめとする近世都市に関わる諸遺跡出土の多種多様な木簡が紹介

されているが、これらは日常的な都市生活の一端を生き生きと描き出してくれるのではないか。見取り図や釈文を眺めながら門外漢として想像を馳せてみたが、そのもつ意味について専門的な見地から論じた論考が是非欲しいところである。

ところで、本誌は木簡についての多様な情報を伝える情報誌としての面と、研究集会の報告や投稿された論文などを広く世に問う媒体として他の学会誌と共通する面の両面をもつてゐる。この両者が車の両輪のように機能してゆくことが望ましいのではなかろうか。すなわち、本誌で紹介された木簡が様々な研究の基礎になるというだけではなく、木簡に関する研究の進展が、情報誌として必要な情報とはどういうものかということを問い合わせ契機となるようと思われる。今後、時代ごとの出土文字資料の特質や、その歴史研究に占める位置などについて比較・検討した研究が広く行なわれることを願つてやまない。

いろいろ勝手なことを述べてきたが、本誌がこれだけの情報を提供できるのは、遺跡や木簡について報告して下さった執筆者のおかげであることはいうまでもない。その執筆者との連絡を含めて、編集の実務については、奈良文化財研究所の渡辺晃宏委員が前号に引き継いで中心となつてこなして下さった。業務多忙な中でのご尽力に厚く感謝したい。